



幸せな贈り物

〇〇名門の家柄

名門の家柄

旧正月になって、家族みんなが集まれば、自然に家族と家系の伝統を誇らしく話したりします。すべての家庭と家系には、それが良いことでも悪いことでも相続される伝統と稼業があります。特に日本では、匠の精神だということで、代々伝わる稼業を神聖視して、誇らしい伝統と感じています。それで、創業100年、4~5代相続してこそ、名刺を出すべきだと思うほどです。子々孫々一分野だけを掘り下げて行き、一家の境地を成し遂げる日本人の相続精神は、今日、世界をしっかりとつかむ日本製造業神話の原動力になったりもしました。その家庭を〇〇名門の家柄と呼んだりもします。それで、名門の家柄とは、特別な権力や名誉や富、知識を持った階層の家系を言うのではなく、その家系だけの思想と伝統、哲学を持って、それを子孫に伝えて良い相続として継続する家系を称する言葉だといえます。ところで、いつからか旧正月になればならない名門の家柄の伝統は影も形もなく、単純に休暇を楽しむレジャー文化でも理解できない偶像文化に捕われて、旧正月症候群に苦しめられている現実になってしまいました。

一度くらい考えてみてはどうでしょうか
すべての人の最高の関心は幸せ、幸せです。どの

ようにすれば、福を受けられるかともがきながら、人々は自分が解決できない問題や困難にあえば「運命だ!」と話します。その一方で、なぜか分からない恐れから占いをしたり、何か信心を持ったり、法事を行ったりもします。ところで問題は、苦しみが続くという事実です。お祓いをしないで、法事を行わなければどうなるのでしょうか。もっと大きい問題がきます。先祖が罰を下すのでしょうか。また、人々は誠実に生きているのに、よくならなければ、悪業の報いだと話します。一つの行為は原因がなければ起きなくて、ひとまず起きた行為は必ずなにかの結果を残して、また、その結果は行為の上に大きく影響を及ぼすということです。その原因・行為・結果・影響を総称して「業」と言います。無仏禅院のソクウ僧侶が言うのには、衆生が3世で輪廻する理由は因果応報のためで、前世に犯したなにかの行為があれば、それをみな返して死んでこそ、次の世に受けなければならぬ悪業の報いがなくなるが、もし、みな返すことができなくて死んだら、次の世に必ず受けなければならぬから、再び生まれて前世に返すことができなかつたものを返さなければならぬと言いました。一般の人は熱心に念仏をとらえて、極楽世界に出れば輪廻が中止されて、修行者は悟りを得て、仏陀の世界に入れば輪廻は中止されるが、悟っても前世の悪業の報いはそのまま残っているか

ら、死ぬ時までその報いは受けなければならないと言いました。はたして、前世と悪業の報いのために人間が不幸になって、輪廻が反復されるのでしょうか。また、人々は自分の人生でドラマチックな方向転換や大きな成功と失敗を経験するとき、これを生年月日による運命（四柱推命）のせいにする風習があります。「四柱推命による運命がそうだというのに、どうするのか」「その女の人は厄年だからだ」ということばは、特に韓国や日本の人々の人生観に根深く入っている表現です。人はだれでも生まれながら、年・月・日・時間、四つの柱に運命という単語が一つずつついていて、それを動物のかたちとつなげて解釈するのですが、四柱推命が同じならば運命も同じでなければならないと主張します。現在、地球上に存在する人口を 65 億人だと計算したら、概略 1 万 2,538 人の四柱推命が同じだという計算が出てきます。それなら、その人々はみんな型にはまったように同じ人生を味わわなければならないのでしょうか。絶対にそうではありません。人の未来と現在を動物のかたちで解釈すること自体が誤った解釈です。いったいなぜ人間がこのように生きていかなければならないのでしょうか。

真の祝福の名門の家柄になろうとするなら...

人間が運命、悪業の報い、四柱推命による運命に捕えられているかぎり、幸せはないと聖書は語っています。なぜでしょうか。不幸にならざるをえない目に見えない霊的背景と人生スケジュールを持って生きていかなければならないためです。目に見えないサタンという霊的存在にだまされて、神様を離れるようになった人間は、罪人になって、罪の奴隷になって、自分も知らない間にサタンの奴隷の役割をしながら生きていかなければならない、不幸な人生スケジュールを持つようになりました。自分も知らない霊的問題に捕われて、罪を犯したくなくても、犯さないわけにいかず、幸せに暮らしたくても幸せなはずがありません。人生を生きていけば生きていくほど、不安と恐れはずっと訪ねてきます。多くの努力と成功の中でも、心のむなしさはより一層激しくなって、結局、目には見えない心の病気になって、

激しい悪夢や金縛りにあい、不眠症に、幻聴と幻覚に苦しめられて、極度の不安からうつ病やそううつ病になり、日常生活まで正しくできなくなる場合があります。ますます多くなります。自然に肉体の健康も、人間関係も崩れるようになって、あらゆる病気に苦しめられるようになります。結局、人間は死ぬようになって、地獄という永遠な苦しみと刑罰の中に陥るしかありません。それだけではなく、私が持っていた良い点と悪い点など、霊的な問題と偶像崇拝の呪いが、驚くべきことに子どもにすべて伝えられて、不幸の相続が続くようになるという事実です。

それなら、はたして真の幸せの道はないのでしょうか。神様は人間が解決できない問題を解決して下さるために「キリスト」を約束してくださいました。キリストはこの世に来てくださって、十字架で死に、復活されることによって、神様を離れたすべての人間が神様に会う道を開いてくださいました（ヨハネの福音書 14:6）。キリストは十字架で私たちの罪の代わりに死なれることによって、私たちのすべての罪を解決して、呪いと災いから解放させてくださいました（マルコの福音書 10:45、ローマ人への手紙 8:2）。キリストは死から復活され、今も人間を困らせて地獄に引っ張っていくサタン（悪魔）のすべての権威を完全に打ち砕いてくださいました（ヨハネの手紙第一 3:8）。キリストは人間の運命の問題を完全に解決されました。その「キリスト（Christ）」がまさに「イエス（Jesus）」です。いま、キリストであるイエス様を信じて心に受け入れることによって、永遠な神様の子どもになって、すべての運命から解放されます。世の中で認められる名門の家柄もすばらしいでしょうが、最高の名門の家柄は最高の祝福である福音を持って、それを次世代に伝える伝統を持った霊的な名門の家柄でしょう。正確な福音の契約が私たちの次世代に相続されるとき、それがまさに根源的な祝福を味わう福音名門の家柄としての開始なのです。

**「主イエスを信じなさい。そうすれば、
あなたもあなたの家族も救われます」**

（使徒の働き 16:31）

キリスト教はなぜ先祖供養を禁じるのでしょうか？

先祖供養の由来 亡くなった先祖を慕って、記憶して記念することは非常に良いことであり、望ましいことです。しかし、死んだ先祖が悪霊になって、供養する日に合わせて食事をして行く乞食の先祖だという発想は、科学的でも、宗教的でも、筋が通った話でもありません。それでも人々は盆や正月になれば知識の有無と貧富格差にまったく関係なく、先祖供養の形式とくびきに自動的に縛られています。盆や正月になれば、供養してもらおうと先祖が袋を両手に持ってドアをあけておいた家ごとにのぞき込むと、シャーマンが自慢げに話していますが、実はシャーマン自身もだまされているのです。『祭事と現代文化』という本には、原始アフリカとインドネシア、古代中国で法事（先祖供養）を行ったと記録しています。中国の宋という国のとき、儒教学者の朱熹が法事を理論的に後押しして、韓国では三国時代のとき、特別な王にだけ法事を行いました。この法事は、高麗を経て朝鮮におよび、多様な形態の祭事文化として発展するようになったのですが、特に先祖供養を行うのは韓国でできたのではなく、中国から入ったのです。周公という人が家を遠く離れて学問に精進していたときに、ある日、突然、父親が亡くなったという知らせを聞くようになりました。とても遠かったので、行くことができず、親孝行を一度も正しくすることができないことを後悔しながら、食卓をそろえて故郷に向かってお辞儀をするようになりました。それを見て弟子たちも始めたのですが、それが中国全域に広がるようになったのです。それが韓国に入ってくるようになりました。こういう祭事文化がご利益信仰に変質して、先祖供養をしなければ罰を受けるという恐れる文化になってしまいました。

聖書はなぜ先祖供養を禁じるのでしょうか 中国の祭事は、すべての家が自分の家系の伝統を大事に思って自慢するために過ごすということですが、私たちは法事をするとき、先祖の霊が来ると思っています。はたして法事は先祖の霊にすることでしょうか。それが事実ならば、聖書で法事を反対するのは先祖に大きく間違ったことをすることです。しかし、聖書はこの点をはっきりと明らかにしています。「いや、彼らのささげる物は、神にではなくて悪霊にささげられている、と言っているのです。私は、あなたがたに悪霊と交わる者になってもらいたくありません」(コリント人への手紙第一 10:20) 親が死んだあと先祖の霊になって子孫に祝福と呪いを与えられるとするならば、子どもが法事を少し間違っただけからといって呪いをくだすことはないでしょう。それでも、法事を正しくしなかったという理由で家に不祥事がやってくる場合が多いのはなぜでしょうか。それは、まさに悪霊が訪ねてくるためです。悪霊はどのようにしても人間をだまして滅ぼそうとします。法事を行うときに訪ねてくるのは先祖の霊ではなく、神様に敵対するサタンの手下である悪霊です。それらが先祖のふりをしながら人間をだますことです。偶像崇拜は家に呪いをもたらして、代を引き継いでほろびるようにすると警告されています(出エジプト記 20:4~5)。ですから、先祖供養を禁じているのです。

神様の子どもになる 受け入れの祈り

愛の父なる神様。
私は罪人です。今まで神様を離れ、サタンの支配の下に縛られて、奴隷のように生きて来ました。
しかし、今、この時間、イエス様を私の救い主、私の神様、私のキリストとして受け入れます。イエス・キリストは、神様に会う唯一の道であり、サタンの権威を打ち砕かれ、すべての罪とのろいと災いから私を解放してくださったキリストであると信じます。いま、私の中に入って来てくださり、私の主人になってください。今から私の生涯を細かく導いてください。
イエス・キリストのお名前によってお祈りします。アーメン

神様の子どもの 毎日の祈り

父なる神様、イエス・キリストによって神様がいつも私とともにおられて、導かれることを感謝します。今日も、すべての生活の中で、神様の子どもになった祝福を味わうように、聖霊で満たしてください。
私の家庭と現場と行くところごとに福音を邪魔して困らせるすべてのサタンの勢力を権威あるイエス・キリストの御名で縛ってください。
どんなこと、どんな問題でも、解決者であるイエス・キリストに任せて、その中で神様のより良い計画を発見しながら、聖霊に導かれる生活になりますように。
そして、私の生活を通してイエス様がキリストであるということがあかしされ私の現場に神の国が臨むようにしてください。毎日、私の生活の中で神様の願いである世界福音化の契約を握って勝利できますように。今も私とともにおられるイエス・キリストのお名前によってお祈りします。アーメン



祝福^豊を 招く対話



韓国には、「言葉一つで千両の借りを返す」ということわざと「行く言葉が美しければこそ、来る言葉も美しい」「バットのようなもので相手に対したら、相手も同じようにしてくる」ということわざがあります。このようなことわざは、先祖が人生の中で体験して得た知恵を次世代に伝達したものです。しかし、人々はこのような先祖のことばに耳を傾けて聞かずに、むやみに話して、人々との関係をめちやくちやにしたり、幸せでなければならぬ家庭に不和をもたらしたりもします。

創造主である神様のかたち造られた人間は、言語を通してお互いの心と思いを分かちあいながら生きていく社会的な存在です。それで、人はだれとも対話できない状況を最も恐れます。その反面、どんな難しい環境でも自分の難しい状況を聞いて理解してくれる人に会えば、勝ち抜くことができます。それでは、このように心と思いを分かちあえる対象を、どこで見つけなければならないのでしょうか。そこは、まさに家庭であるべきです。家庭で家族に最も必要なことはお金ではなくて、対話です。家族間で心をやりとりする対話、愛を確認して分かちあう対話、深い関心を現わす対話、重荷をとともに分かち合う対話が必要です。

人は対話せずには相手を理解することができなくて、愛とは対話という手段を通すだけで表現されて伝えられ、人はだれかと対話がなければ孤独でさびしい感情が生じるためです。

それでも家庭で家族どうし対話がうまくできない理由は何でしょうか。

その原因は「雄弁は銀であり、沈黙は金だ」という言葉を聞いて育ったため「君子は心の状態を表わさない」と習ってきたし、「相手に対する細かな配慮や関心を見せることは器が小さい人だ」と感じる文化の中で生きており、普段の対話の訓練を受けることができなかったためです。

そして、対話にも等級があるのですが、レベルが低い5級の対話から、とてもレベルが高い1級の対話があります。例をあげるなら「こんにちは」「お元気ですか」「ああ、疲れた!」「寒いですね!」「あなた

愛していますよ!」というように、相手を考慮しないで意味もなく習慣的に言う言葉は、レベルが低い5級の対話で、「うれしそうですね」「疲れているみたいに見えますよ!」などのように、自分の意見を表現しないで客観的な情報や知識だけを単純ニュースのように話す対話は4級の対話です。3級の対話は客観的な事実と自分の考えを追加して意見を交わす対話として相手を見ながら「うれしそうだけど、なにか良いことがあったの?」「あなたの髪型が変わったから、ずっと若くてきれいに見えるよ」ニュース解説と同じ対話です。2級の対話は自分の考えといっしょに感情、感じ、好きなこと、嫌いなこと、喜びと悲しみ、失敗と成功、夢のような人生の全分野を分かちあう対話で「あなたがうれしそうに見えるから、私もうれしいな!なにか良いことがあったみたいね」こういう対話で、とてもレベルが高い1級の対話は、率直に人格的な深い対話で、相手と自分を分かちあう真実の対話です。例をあげるなら「今日、美しくて素晴らしいあなたを見たら、あなたといっしょに旅行でも行けたら良いなと思う」という対話です。

家族みんなが集まる旧正月、家族の間で分かち合う対話のレベルに級を付けられたら、あなたは何級のレベルでしょうか。

「柔らかな答えは憤りを静める。しかし激しいことばは怒りを引き起こす。
良い返事をする人には喜びがあり、
時宜にかなったことばは、いかにも美しい。」

(箴言 15:1、23)

* 相談したい方はこちらまでどうぞ